

# 2011年度 代表事業②

事業名

## しずおか未来学園

Beautiful Tomorrow 未来は僕らの手の中

委員会

共育の心創造委員会

委員長：宮崎 貴久

副委員長：成竹 香澄

副委員長：花城 孝尚

幹事：前田 洋希



事業趣旨要約

交流が希薄な現代では、「人として正しいこと」を子供たちに伝えられているとは言えません。また探求心が育まれにくくなっています。そこで、「人として正しいこと」に自ら気づき、相手を思いやる心を育む環境が必要です。また、仲間とともに考え、手を携えて一つの事をやり切ることで感じられる達成感や、相手への感謝の心を育むことも必要だと考えます。

本年のしずおか未来学園では東日本大震災で被災した釜石市の児童を迎え入れ、静岡市在住の児童が被災地の子供たちと寝食を共にすることで「当たり前の生活への幸せ」を感じ取ってもらう機会を創り出します。そして、生活できることへの有り難味を感じ、周りへの感謝の心と人として正しいこと、つまり道理を理解させます。仲間や世代を超えた人達と共に行動して「周りに支えられながら生きていること」に気付くことで思いやりの心が育まれます。子ども達が心から自分たちの生活への幸せを感じる事がまわりへの思いやりに繋がり、静岡ICを目指す「思いやり溢れるあたたかい静岡」の実現への大きな足掛かりになります。

背景

- ・「人として正しいこと」が希薄になりつつある。
- ・世代や地域を超えた交流が希薄な現代では、友情を育む場が減っている。
- ・ネット社会の影響で子ども達の探求心が育まれにくくなっている。
- ・東日本大震災を機に人と人との繋がりの大切さを再認識する必要がある。

効果

- ・人は一人で生きていない事に気付くことで相手を思いやる心が芽生える。
- ・生の情報を知らせることでなぜ・どうしてという探求心を育ませることが出来る。
- ・固い友情を育むことができる。
- ・当たり前の生活への有り難味を感じ、まわりの人・物全への思いやりの心が芽生える。

例会の流れ・目的

- ・児童募集期間（7月8日から7月22日）
- ・保護者説明会（7月24日） 釜石市双葉小学校
- ・メンバー向け説明会（7月25日）
- ・静岡市での事前説明会（7月31日） 静岡県自衛健康会館
- ・合宿（8月4日から8月5日） せせらぎの宿 紅竹
- ・ホームステイ（8月5日から8月7日） 静岡市内
- 【未来学園 本事業】
- ※8月3日夜岩手県釜石駅に子ども達をお迎えに行く。チャーターバスにて静岡市内へ移動。（車中泊となる）
- 8月4日
- ①しずおか未来学園 開校式、
- ②児童同士のディスカッション（テーマ「幸せなまち」）、理想な幸せなまちを子ども達で話し合う。
- 最後にそれをグループごとに絵で表現する。
- ③子ども達みんなでのバーベキューで夕食をとる。 ④宿泊先（せせらぎの宿 紅竹にて宿泊）
- 8月5日
- ①ラジオ体操、朝食。
- ②港かつばね踊り、合唱の練習（静岡市、釜石市の子ども達と共に7日に披露する。）
- ③日本平動物園で観光及び昼食。（静岡市、釜石市の子ども達の交流をはかる。）
- ④解散、ホストファミリー宅にて宿泊

達成検証

- 事業目的に達した点：
- ・友情を育む中で思いやりの心を養うことが出来た。
  - ・自ら考えることの出来る探求心を育むことが出来た。
  - ・「当たり前への幸せ」を感じることが出来、如何に自分が恵まれているかに気づくことによって「人として正しいこと」を理解する事ができた。
  - ・当たり前への日常に幸せを感じ、感謝することで相手を思いやる心を育むことが出来た。
  - ・多数の児童と各手法に取組む中で人として正しいことを教えるという大人としての使命を感じてもらったことが出来た。
  - ・被災の当事者を招いて事業を行う中で利他の心を育むことが出来た。

所見

事業に対する所見  
釜石市、大塚町の現状を目の当たりにして「やるしかない」「やらなければならない」という思いで上程を進めました。岩手県の児童、静岡市の児童、そしてホストファミリーの募集が始まり定員以上の応募という結果が出て「利他の心」を強く感じました。集まった岩手の児童の中には両親を亡くした子、家が流されて仮設団地で暮らす子など直接被災した児童が多かったのですが、静岡福祉大学によるメンタルケア、ホストファミリー宅でのサポートなどがあり安心して事業を進めることが出来ました。

開校式では全員が笑顔で静岡の児童と顔合わせをして、直ぐに仲間の輪が出来たのは何となく前向きにはつらつと取組む子供ならではの姿であり、私たち大人が見習うべきことだと感じました。最終日の7日まではあつあつという間に時間が過ぎ去りましたが、全員がひとつになったかつばね踊り、夜空を彩る花火を3日前に知り合いの友情を育んだ静岡と岩手の児童、そして我が子のように迎え入れて頂いたホストファミリーたちが見上げる様など、最後のパーティーで本当の家族のように団欒する様子を見てこの事業をやった良かった心の底から感じました。同時に、協力頂いたメンバーや清水みなと祭り実行委員会をはじめとした多くの方々の「利他の心」のお陰で運営出来たことを感じ、本年度理事長が掲げた「思いやり溢れるあたたかい静岡」に少しでも近づけたように思えました。

最終日7日の講師授業のステージで大塚町の児童が発言した、「今は瓦礫ばかりの町だけれど、いつか静岡のように綺麗なまちに蘇らさないといいです。」という言葉聞いて平穩無事に暮らす私たちがそが更に日々を充実して生きるべきであり、不自由な生活を余儀なくされている方々へ継続的に支援をする必要を感じました。

児童や保護者からもお礼の手紙やメッセージを受け取っており、人と人との絆や思いやり、利他の心を私自身も感じてまいりました。

年間活動に対する所見

当初予定していた事業そのものが3月11日の東日本大震災で急遽内容を白紙状態まで戻すことを余儀なくされ、短期間での上程書作りや被災地への現地事前調査、協力団体との連携、協議など多忙な日々を送りました。被災地から招いた30名の児童の笑顔と帰郷後のお便りや保護者からのお礼の声を思い出すと、幸せな1年間を過ごさせて頂いた静岡青年会議所に感謝の念が尽きません。静岡の児童には、「今ある日常が幸せであること」を感じてもらう為に、ホームステイなどで深い交流をしてもらいましたが、その幸せを私達大人も強く感じる事が出来た事業になりました。

目的

- ・仲間や大人達と何かを成し遂げることで達成感を感じ、友情を育むことで思いやりの心を養う。
- ・情報だけに惑わされず、自ら考えることの出来る探求心を育む。
- ・周りの人との触れ合いの中の「人として正しいこと」、つまり物事の道理を理解する。
- ・今ある当たり前への日常の幸せを感じ、感謝することで相手を思いやる心を養う。
- ・共育（子どもを共に育てる）に携わることで、人として正しいことを教えるという大人としての使命を感じてもらった。
- ・東日本大震災への支援に繋がる活動をする事で利他の心が育まれる。

事業概要

日時場所：2011年7月24日から8月7日まで  
参加人数：静岡市内の児童（小学4年生から6年生）50名、岩手県釜石市の児童（小学4年生から6年生）30名  
とその保護者 + ホストファミリー15家族、 静岡JCMメンバー（結果、178人参加）  
事業総額：2,696,690円

- 8月6日（中央体育館）
- ①静岡郷土館の下駄製作の見学と製作、及び、絵の製作（前日のディスカッション「幸せなまち」を表現した絵の制作）
  - ②静岡市街地の紹介と散歩しながら昼食をとる。（釜石の子ども達に自分たちの街を紹介することで思いやりの心を育む。）
  - ③清水みなとまつり 港かつばね踊りに参加、
  - ④ホストファミリー宅にて宿泊
- 8月7日（未来学園例会 清水マリンパーク）
- ①清水みなとまつり 星の部見学、昼食をとる。
  - ②講師の授業（例会）として、清水マリンパーク（清水エスパルスドリームプラザ付近）に集合。未来学園内での児童活動の発表（幸せなまちについて絵と共に発表。子どもたちが考える「未来の街の絵」を発表）。講師と共に合唱の発表（①翼をください、②上を向いて歩こう）、講師公演（シンガソングライター松本哲也氏）を聴く。
  - ③さよならパーティー、（清水テルサにて懇親会）
  - ④清水港日の出陣頭火大会見学、
  - ⑤解散 ※チャーターバスにて釜石駅まで送迎（車中泊となる）



**担当委員長Q&A**

**01** 当該年度中に東日本大震災が起り、未来学園のご計画を急遽変更されたとお聞きしました。当時静岡JCだからこそできる何かとして未来学園を選んだと思いますが、具体的にどのような経緯で東日本大震災復興に結びついたのでしょうか。

まず静岡の子ども達の為に何が出来るかを考えました。もちろん理事長所信である「利他の心」を育む事業になることも考え、そして、東日本大震災にて被災した東北の子ども達に何か出来るかを考えました。未来学園は夏休みに行く事業です。東北の夏休みは短く、震災後の貴重な夏休みを震災地域から外にで、「一人ではない」ということを感じてもらうことを目指しました。静岡の子ども達にとっては、震災で困っている子ども達と交流する貴重な体験をし、両者に「利他の心」、他人を思いやる心を育んでもらいたかったです。

**02** 東日本大震災で被災した街の中からどのような経緯で岩手県釜石市を選びましたか。

震災した町はたくさんありましたが、その中でも甚大な被害を受けた町、助けを特に必要としている町をLOMとして助けたいと思いました。静岡JCと深い関係の有る岩手県遠野市の遠野JCが、助けを必要としている釜石JCを紹介してくださいました。釜石JCの御協力を得て、釜石市の子ども達への支援の機会ができました。

**03** 被災地の子ども達に我がまち静岡からどのような気づき・学びを持ち帰ってもらいたかったですか？

被災地の子ども達の中には、両親を亡くした子供などもおり、本当に悲惨な状況下にいる子供たちが多かったです。その中で、静岡の子ども達や我々メンバーと触れ合い、そこから「仲間がいる。一人ではない。」ということを感じてもらって、勇気や希望を持っていただきたかったです。

**04** 被災地の子ども達にとっては初めての町であり初めて会う静岡の子ども達であったと思います。子供たちの反応はいかがでしたか？

釜石市から静岡に来るまでのバスの中では、子ども達は緊張しており、中には、発熱した子供もいました。そのような状況を想定して、メンバー側もアイズブレイクとなる時間を用意していましたが予想以上でした。しかし、釜石の子ども達が静岡に到着して、静岡の子ども達に会った時から自然と打ち解けていきました。それまでの緊張はすぐに消え、ほとんどの子どもがお互い楽しく過ごしている様子でした。なかには、数名笑顔が出なかった子供もいましたが、最後には全員から笑顔が見られました。

**05** 子ども達の引率での苦労とそこから得た成果にどのようなものがございましたか。

全体で苦労を感じた場面はあまりありませんでした。子ども達は志が高いものが多く、皆がモラルを守って行動していました。静岡の子ども達は、もともと、震災で困っている子ども達を助けたいと思っている子達が集まったように感じました。そんな中、大学生ボランティアの協力を得て、震災で傷ついたり子供たちの心のケアに配慮しました。また、静岡市街地での行動にあたっては、安全面に配慮した結果、事業全体を通して苦労はあまり感じませんでした。

**06** 児童同士のディスカッション・テーマ「幸せなまち」を行ったとお聞きしました。

そこで子ども達からどんな意見が出ましたか。また、委員長が描いていた答えと結びつきましたか。「幸せなまち」というテーマで、子ども達が絵をかき表現しました。その写真を見れば当時のディスカッションの成果がわかると思います。

**取材全体としてのまとめ・感想**

この事業が子供たちにとってとても大切な機会であり、メンバーも達成感を得る最高の事業であった様子が伺えました。震災復興という一つの事業ですが、それは、LOMメンバーにとっても、人として単純に正しいことをすることの重要性に気づき「他人を思いやる心・利他の心」を学ぶ機会になりました。

**07** 子供たちの成長・変化をみて委員会メンバーの意識はどのように変わっていききましたか？

事業目的にあるように「利他の心」で委員会メンバーは活動しましたが、最後は子ども達全員笑顔を見て、「人として正しいことをさせてもらった。」という達成感でいっぱいでした。友情を育み、未来学園を通して成長したことを感じ、メンバーも本当の意味での「利他の心」を感じたと思います。

**08** 今回の事業に参加してくれた子供たちにどのような大人になってほしいと思いますか？

子ども達には、「思いやりのある人」・「前向きで明るい人」になってもらいたいですね。

**09** 静岡と岩手の子ども達の友情を育むためにどのような工夫をしましたか。

例えば、日本平動物園など行って観光されたこと聞きましたが、効果はありましたか。日本平動物園や清水みなと祭りに参加したことは単なるきっかけに過ぎませんでした。静岡と岩手の子ども達もどこでも楽しく過ごしていました。最後の解散のときは、全員が泣いて別れを惜むくらい結びつきを強くしたようです。

**10** 未来学園に参加された子ども達から、委員長宛に手紙が来たなど、良い話を耳にします。

今現在静岡と岩手の子ども達の交流はどのように行われていますか。今でも年賀状が来ます。また、参加した静岡、岩手の子ども達の親同士交流があります。静岡のホストファミリーが、当時泊まった岩手の子ども達の親のところに遊びに行ったこともあったそうです。委員長自身、娘2人と一緒にいつか旅行に行きたいと夢を描いた手紙を岩手の子ども達へ出したこともあります。

**11** 当時参加していた子ども達にはどのように育ってもらいたいと思事業を行っていましたか。

単純な物、人、環境の比較が幸せの比較ではないということ、自分にとって核となる幸せとは何か。それらについて考えてくれる、気づいてくれることを願い、事業を進めました。



**取材前後での特に気付いた点**

4日間の事業でメンバーたちは苦労はあまり感じなかったとういことに驚きました。子ども同士楽しく交流し、それを見て、メンバーたちは人として正しいことをしているという達成感が苦労を消し去ってくれたとの事でした。